

助成年度：平成3年度

[所属] 石垣市立 吉原小学校
[役職] 教諭
[氏名] 大山 了己

[課題]

八重山の民族音楽に見られる自然環境の認識

[内容]

八重山の歌謡には、神歌、ユンタ、ジラバ、アヨウ、ユングトなどがあるが、その歌謡は社会生活の中でそれぞれ歌われる場が定まっている。例えば、稲作の収穫を感謝したり、来る年の豊作を祈願する豊年祭が八重山の各島、各村に残っているが、豊年祭で歌われる歌は神歌であり、ユンタ、アヨー、ジラバ、節歌等が歌われる。また、八重山は四面を海で囲まれており、海や海辺に関連する歌も数多くある。それは漁に関する歌であったり、動植物の歌であったりするように、かつて、八重山の人々が自然と対面した生活を営んできたことを歌から窺い知ることができる。このようにして、人々の生活の中に根ざした音楽文化は、島の人々と共に歩み、島の生活を支えて来た。八重山の人々が農業を主にしてきたとはいえ、農閑期には出漁し、漁民と同様に生活に海の幸をふんだんに利用していた。島の周りを海で囲まれた八重山は、生活の活動の場を海に依存することが大きい。

このように、自然の豊かな八重山に数多くの民俗音楽が残されていることは、島の人々が島の生活の中で歌を大事にしたことによる。さらに、生活の中で行事と結びついて歌が残されていることにもよる。しかし、民俗音楽から島人が自然環境をいかに認識していたかという決定的な証拠となる分析は、いまだかつてなされてはいない。島の人々は島の自然的環境や文化的環境と密接に結びついており、島に存在する民俗音楽は、島の自然的環境や文化的環境を島の言葉や旋律にのせて歌っていると考えられる。つまり、民俗音楽に取り込まれた歌詞や旋律を分析することは、島人が認識した環境空間をとらえることになる。さらに、民俗音楽を分析することによってその当時の自然環境を構築することができ、現在の自然環境と比較できることにもなる。

今回の調査は八重山のユンタ、ジラバ、アヨーの歌の中でも自然に関連する歌を取り上げ、島の人々が認識した環境空間をとらえてみた。八重山は各島々でサンゴ礁が発達しており、島人はそれを島の生活として最大限に利用してきた。そのため、島人は島とサンゴ礁（海）の認識がはっきりしている。例えば、島の数々の場所に名前がつけられ、島人が島の環境を自分との関わりとして認識している。さらに、島では農業が主であり、農業に関連する気象条件（雨や風等）を星、雲、動物等からの的確に感じ取っていた。畑は生きて行くうえで欠くことのできない空間であるが、さらに、海は八重山の島人にとって無限の可能性を秘めた環境空間であり、島人が生きて行くうえで重要な空間でもある。

民俗音楽の中でも多くの自然に関連する歌が見つかる。これは、島人が島の環境を十分に知りつくし、島の行事の中で歌を大事にし、受け継いできたことによる。島人は島の環境（地形、海、天、空、動物、植物）をすべてを認識している。各島には島の言葉で、島のそれぞれの場所に名前がつけられていて、島の空間を十分に熟知している。農業を主にした人々は、農閑期には出漁し生活の糧を得ていたので、伝統的な漁法も多く、出漁する場所、魚のいる場所、出漁経路、魚の種類、網に使う材料、餌等関連するものはすべて島の人々の認識の範囲にある。

また、島の行事が1年を通してあり、そこで村の歌として残されたものも多い。さらに、歌は村の人々の家の新築や農作業の際、歌われ受け継がれてきた。このようなすばらしい民俗音楽を歌詞や音階の面から分析してみると、マニムルヌイシケマユンタのような恋の歌の中にも魚や植物が登場する。また、パルマミチ

ィダカユンタ、ペンガントウレー節、ヤクジャーマ節等のように自然の歌だけのものも存在する。さらに植物を歌ったウフンガーラヌピニング、ピンニキュイウタ等、自然の風や地形、星等を歌った歌もある。

音と自然との関連性はあるのかと言う疑問に答えるのは、大変難しい問題であるが、三味線の音がない時代の歌、ユンタ、アヨー、ジラバはその疑問に答えてくれるだろう。自然に関連する歌の音階を分析してみると、比較的古くから在ったとされる律音階は自然に関連する民俗音楽に多く、中には、琉球音階（ドミファソシド）と結合した形になった歌もあるのではないだろうか。つまり、律音階は、はじめから八重山にあり、三味線の歌の普及と同時に琉球音階が八重山に混入したことが考えられる。

また、八重山の古いユンタ、ジラバ、アヨーの自然に関連する歌から分析すると、琉球音階が少なく律音階が多い。これは古くから島にすむ人々が歌うものは律音階が多かったと言える。また、西表島にカザフキヤという3音構成の歌があり、これは音階というよりも音を発することで何かを訴えていたのではないのだろうか。つまり、もっとも古い音階はこのような2音とか3音の世界ではなかったのだろうかと考えられる。

島人が歌うということの意味は、歌詞と旋律の両方をリズムにのせて発声するということである。歌詞は単に動植物の生態、地形、風、星等を歌うが、その内面性は島人の自然に対する驚異であったり、示唆であったり、島人の苦しみ、悲しみ、喜びであったりする。音は心のなかの概念を表現したり、外界の事物を表現する関係にある。言い換えると、これは心の中の感情を自然の動植物に鏡として映して出していることにもなる。

八重山の島人の生活は自然に深く根ざしており、自然を生活していたのであり、日常の生活が自然のうつろいとともになされたことは当然である。また、島人は自分の島だけでなく、他の島の認識も十分に熟知していた。これは、西表島に畑を求めたり、木材を切り出しに行ったり、ジュゴンを捕獲しに出漁したりする等、島の数々の歌から読み取ることができる。現在、八重山の海から消えたジュゴンを始め多くの動植物環境の変化が見られる。歌われた当時、島々には豊かな自然環境が認識されていたはずなのに、そのすばらしい文化遺産が消えてしまいつつある。今一度、我々はすばらしい八重山の自然環境を見つめ直すことが必要である。